特集 菊陽（ここ）が出発点、夢の力。Vol.4

Profile ●平成５年菊陽町生まれ。杉並台幼稚園、菊陽中部小学校、菊陽中学校卒業。中学校で陸上の楽しさを学び、九州学院高等学校へ進学。その後、陸上の強い選手が集まっている青山学院大学へ進学することを決意。現在、同大学４年生。趣味は食べ歩きと温泉。好きな言葉は「笑顔」。

周りを〝笑顔〟にするランナー

Life is fun

Kubota Kazuma

「久保田和真の挑戦」

ことしの箱根駅伝で優勝を勝ち取った青山学院大学陸上部、久保田和真選手。常に自分より上のレベルで競り合いたいと情熱を燃やす一方で〝陸上は楽しむもの〟と笑みを浮かべる。その芯の強さと柔軟な心はどのように育まれたものなのか。生い立ちから現在に至る軌跡を追った。

「ずっと姉がライバルでした」

子どものころの目標は、成績優秀でスポーツも万能だった３つ上のお姉さんでした。「姉の人生そのものに対抗心を燃やし『いつか超えてやる』と思っていました」

陸上選手だった両親のもとに生まれた久保田さん。しかし、一度も親から陸上を教わったことはなかったそうです。「小学生のころは姉とスイミングスクールに通っていました。走るのは遅かったし、陸上をやろうと思ったことは一度もありませんでしたね」

転機が訪れたのは中学1年生のころ。父の友人に勧められるまま陸上部に入部しました。「最初はなんとなく続けていました。でも、合志貞臣コーチと出会い、歩き方から指導を受け、だんだんと陸上の楽しさを感じるようになったんです。コーチの口癖は『陸上を楽しめ』でした。その言葉は、今も心に残っています。練習した分、結果がついてくる。どんどん陸上の魅力にはまっていきました」

「走ることが好き―」。久保田さんの心に芽生えたその気持ちは追い風になり、さまざまな大会で結果を出します。その後、陸上の強豪校・九州学院高等学校に入学。卒業後は、青山学院大学へ進学しました。

挫折と飛躍

大学2年生の夏、練習中にひざに激痛が走りました。診断結果は、じん帯が骨とこすれて痛みが出る「腸脛（ちょうけい）じん帯炎」。半年以上走れませんでした。「つらかったです。走りたい、試合に出てあの緊張感を味わいたい―。そうずっと思っていました。『もう走れないんじゃないか』と落ち込んでいた僕に、監督は『走れようが走れまいがお前はチームに必要だ』と言ってくれたんです。この経験は自分のプラスになると切り替え、大学2年の箱根駅伝では選手が100％の力を出せるようサポートしました」

その後、親の後押しを受け、不安の中臨んだ手術も無事成功。仲間にも支えられながら復帰に向けて治療とリハビリに励み、3年生の9月に練習に復帰しました。「復帰してすぐはついていくので精いっぱいでした。でも『苦しい』より『楽しい』が大きかったです」

どんなときも自分と向き合い、逆境をばねに頑張ってきた久保田さん。ことしの箱根駅伝では見事、初の総合優勝を勝ち取りました。

「僕は『負けたくない』より『楽しみたい』と思うんです。自分より上のレベルの人と競り合い、会場を沸かせたいと。だからきつい練習も頑張れます。今は大学駅伝3冠を目指して頑張っています。チームメイトも良いライバル。『山の神』と言われ、有名になった神野大地くんも『お前には負けない』と言ってきます。燃えますね。切磋琢磨して、チームのレベルも上がっています」と熱い闘志をのぞかせます。

〝本気〟が道を開く

「阿蘇山を望める菊陽町が好きです。帰ってくるとやっぱり落ち着きます」と目を細めます。「夢は東京オリンピックに出ること。周りを笑顔にできるランナーになりたいです。僕の走りを見た子どもたちが、陸上をやりたいなと思える走りをしたい。そして子どもたちも菊陽で自分がやりたいことを見つけ、本気で取り組んでほしいです。僕はそれで道を開いてきましたから」

1 2014年の全日本大学駅伝対校選手権大会　2 同級生の誕生会　3「支えてくれる周りの人が和真の財産。彼の強みは、試合に向けて調子を高めていけることですね。これからも見守っています」とほほえむ父・茂さん

夢に向かって一歩一歩

彼は陸上を通して、芯の強さを身に付けた人。どんな大会でも物おじせず堂々としています。けがをしたときは心配しましたが、乗り越え成長した姿を頼もしく感じました。いつも笑顔で夢に向かって一歩一歩進む彼をきっかけに、多くの人が陸上を好きになってくれればうれしいですね。

合志貞臣さん（曲手）
菊陽中陸上部で30年以上コーチを務める